



第 16 回

北アジア調査研究報告会

16th Annual meeting of the RANA



北アジア調査研究報告会実行委員会

第 16 回 北アジア調査研究報告会

日時 2015 年 2 月 21 日 (土) 13:00 ～ 17:00 受付開始 12:30

2 月 22 日 (日) 9:30 ～ 15:00 受付開始 9:00

会場 東京大学本郷キャンパス法文 1 号館 113 教室

主催 北アジア調査研究報告会実行委員会

プログラム

2 月 11 日 (土)

[海外調査報告・研究発表 (1)]

- | | | |
|--------------------|-------------|---|
| 1. 正司哲朗ほか | 13:15-13:45 | モンゴル国における遺跡デジタルアーカイブとカラコルム博物館展示 |
| 2. 内田宏美 | 13:45-14:15 | モンゴル帝国期における弓矢製作技術の復元 |
| 3. N. Tsydenova ほか | 14:15-14:45 | Overview of the technological aspects of transition from the Late Paleolithic to the Initial Neolithic in the Baikal region |
| 4. 宮本一夫ほか | 14:45-15:15 | モンゴル国バヤンホンゴル県ボル・オボー遺跡の発掘調査から見た青銅器時代墓葬の展開 |
| 休 憩 | | |
| 5. 白杵 勲ほか | 15:30-16:00 | モンゴル国ムンゲンモリット村ホスティン・ボラク 2 遺跡の調査 |
| 6. 小畑弘己ほか | 16:00-16:30 | 匈奴と穀物 |
| 7. 森先一貴 | 16:30-17:00 | ロシア極東における前期・中期新石器時代石器群の地域性 |
| 懇親会 17:30 ～ | | |

2 月 22 日 (日)

[海外調査報告・研究発表 (2)]

- | | | |
|-----------|-------------|-----------------------------------|
| 8. 加藤真二ほか | 9:30-10:00 | 華北土器出現期に関する予察 |
| 9. 福田正宏ほか | 10:00-10:30 | サハリン中部アド・ティモボ遺跡群の考古学的調査 (2014 年度) |
| 休 憩 | | |
| 10. 中澤寛将 | 10:45-11:15 | 2014 年度ロシア沿海地方渤海遺跡現地調査概要 |
| 11. 小嶋芳孝 | 11:15-11:45 | 六頂山墓群の検討 (瓦出土墳墓を中心に) |

[国内調査報告・研究発表]

- | | | |
|------------|-------------|--|
| 12. 出穂雅実ほか | 11:45-12:15 | 北海道河東郡上士幌町嶋木遺跡における 2014 年度 (第 5 次調査) 発掘調査の概要報告 |
| 昼食休憩 | | |
| 13. 高倉 純 | 13:15-13:45 | 広郷型細石刃核を伴う石器群での剥離技術分析 |
| 14. 大貫静夫 | 13:45-14:15 | 文化史考古学からみた北海道縄文早期の環境変動 |
| 15. 山谷文人ほか | 14:15-14:45 | オホーツク文化の有孔砥石について |
| 閉会挨拶 | | |

サハリン中部アド・ティモボ遺跡群の考古学的調査（2014 年度）

福田正宏¹・グリシェンコ, V²・ワシレフスキー, A²・大貫静夫¹

佐藤宏之¹・熊木俊朗¹・國木田 大¹・ペレグドフ, A¹・内田和典³

森先一貴⁴・役重みゆき¹・夏木大吾¹・山下優介¹

（1：東京大学、2：サハリン国立大学、3：北海道教育委員会、4：奈良文化財研究所）

1. 調査の目的と経緯

更新世から完新世への環境変動の下、環日本海（「極東」）地域に定着的食料採集民が登場する。うち、大陸側には、大貫静夫（1992・2010）が「極東平底土器社会」とよぶ新石器諸文化が展開しはじめる。この極東平底土器社会と日本列島の縄文土器社会との関わりを考えると重要なのが、環日本海北回りネットワークにおける大陸側の玄関口であり、東シベリアとの交渉もあったアムール下流域である。また、アムールと北海道を結ぶ位置にあるサハリン島にも、注目する必要がある。日本列島北辺域の完新世歴史動態を解明するため、我々は、これらの地域で日露共同調査を続けてきた（福田ほか編 2011・2014 など）。

2011 年度から、主な研究対象を新石器時代の最温暖期以前に定めた。そして、ロシア極東における新石器的生活構造の定着プロセスや、それに先だつ縄文早期（ロシア極東考古学でいう新石器時代前期にほぼ並行）の大陸～北海道にひろがる高度な石刃技法の背景にあるヒトの動きや社会構造に注目した調査研究を行ってきた（大貫・福田編 2014、福田ほか編 2014）。

2013 年度は、北海道東部・湧別市川遺跡とサハリン南部・スラブナヤ 5 遺跡の発掘調査を実施し、いわゆる石刃鎌文化期（未較正炭素年代 7500 ～ 7000BP 前後：國木田 2014）における北海道とサハリンとの関係性を再考するための新資料を得た（夏木ほか 2014、福田ほか 2014・2015）。その結果をふまえ、2014 年度は、サハリン中部・ツイミ川中流域における並行期の様相解明に取り組んだ。

新石器時代前期のサハリン南部では、北海道産黒曜石の流通が活発化した。同時期の道東（縄文早期中葉）では、サハリンでもともと普及していた高度な石刃技法が特徴的な、石刃鎌石器群が出現した。一方、近年の調査から、ツイミ川・ポロナイ川・ナビリ川の流域を含むサハリン中部に、更新世～完新世初頭（新石器時代前期）の遺跡が濃密に分布し、近隣の東サハリン山脈で産出される赤色ジャスパーが戦略的に消費されていたことが判明している（Василевский, Грищенко 2014：図 2 参照）。サハリン南部とは石材環境や食料資源が大きく異なるサハリン中部の様相を適切に位置づける必要がある。

2. 調査の概要

2014 年度は、日本学術振興会二国間交流事業オープンパートナーシップ共同研究「サハリン・北海道間における先史時代文化交流の解明のためのワークショップ」（日本

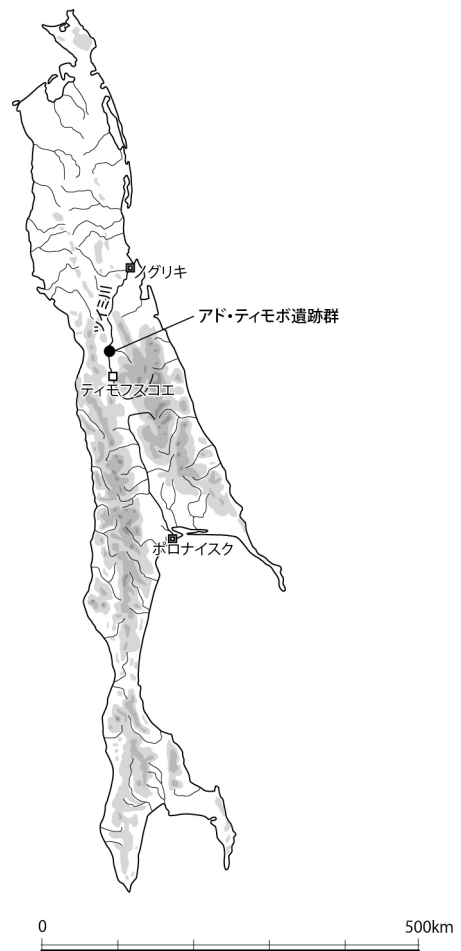


図 1 アド・ティモボ遺跡群の位置

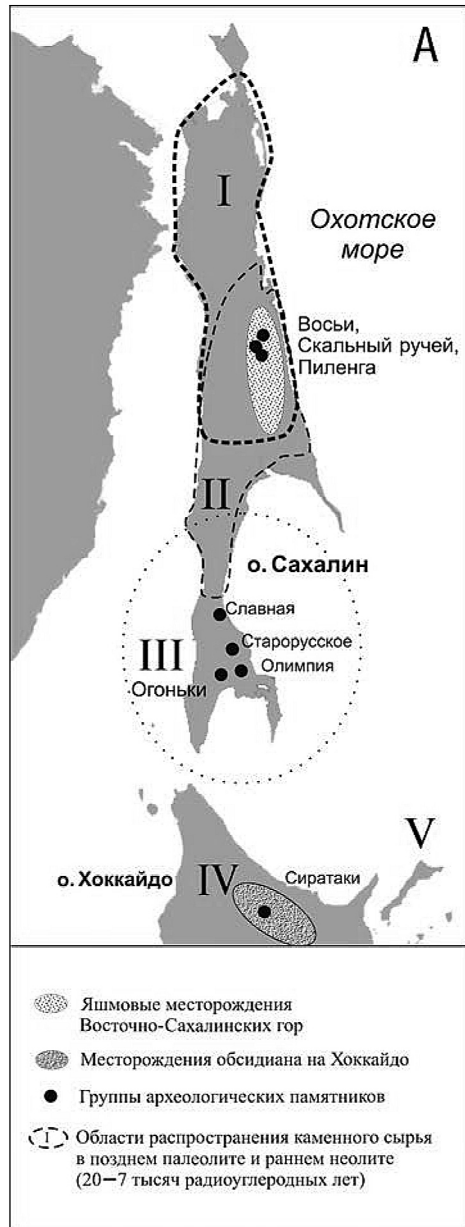


図2 サハリン・北海道・南千島の石材分布 (Василевский, Грищенко 2014)

と谷底の比高差は 50m 以上ある。本遺跡は、プジ川右岸の尾根先端部にひろがる狭い平坦面上にある。海拔 160m、ツイミ川辺との比高差は 110m と報告される (Горбунов 2000)。

今回、ゴルブノフ S.V. による旧発掘調査区とその周辺を視察し、崩落崖面や倒木痕など、露出した包含層からの遺物採集も行った。包含層は海成堆積物とみられる砂質土からなることを確認した。回収遺物 (図 5・6) は、ヤンシナほか (2012) で報告された新石器時代前期のものとはほぼ同じである。懸案の短冊形型押文土器も採集された。これは道東の女満別式とは別型式であり、施文技術や施文部位からアムール下流域のコンドン式系統にあると判断すべきである。ティモフスコエ郷土博物館で旧調査資料を観察したところ、採集資料と同様の観察結果が得られた。

アド・ティモボ 33 遺跡 アド・ティモボ 2 遺跡に連なる丘陵南端から上る痩せ尾根先端部で、複数の窪みが発見された。新たに所在確認された遺跡である。海拔は約 120m。少なくとも 2 基は、住居とみられる。最大の窪みは約 10×10m の多角形プラン。窪み群の南側斜面は頂上付近が崩落し、

側共同研究代表者：大貫、相手国側共同研究代表者：ワシレフスキー) および、科学研究費助成事業「環日本海北回廊の考古学的研究」(研究代表者：大貫) を受け、東京大学とサハリン国立大学が共同調査を実施した。

2014 年 6 月 25 日～7 月 9 日に、サハリン中部、ツイミ川中流域 (ティモフスコエ盆地北部) に位置するアド・ティモボ村で遺跡分布調査を実施した。また、東サハリン山脈北部 (ナビリ川上流域) の赤色ジャスパー原産地の視察や、遺跡情報に関する地元住民からの聞き取りも、あわせて行った。

アド・ティモボ周辺の遺跡群は、1970 年代前半にフェドルチュク V.D. が発見したことにより、その存在が周知された。アド・ティモボ遺跡群では現在までに、32 遺跡が発見・登録されている (Горбунов 2000)。ただし、遺跡探査を主目的とした小規模試掘調査が多かったようで、全体の様子が報告されている遺跡は少ない。新石器時代、古金属器時代、中世 (オホーツク期を含む) の遺物の存在が報告されており、赤色ジャスパー製、黒曜石製の石器剥片類なども採集されている。ツイミ川下流域やサハリン北東部のピリトゥン湾・チャイボ湾で近年確認されている完新世の文化変遷は、この地域でも総じて認められるようだ。

アド・ティモボ 2 遺跡 アド・ティモボ遺跡群のなかで最も注目されるのは、アド・ティモボ 2 遺跡である。本遺跡では、道東・女満別式土器やアムール下流域・コンドン式古段階の土器文様 (内田 2011 参照) に類似した短冊形や円形の型押文をもつ土器が出土している (ヤンシナほか 2012：図 3 参照)。佐藤達夫 (1964) の指摘に即し、女満別式と大陸側の類例とを結びつける例となる可能性がある。

遺跡は、ツイミ川を見下ろす丘陵 (海拔 100 ～ 200m) の先端部に位置する。丘陵にはツイミ川に流れ込む V 字谷 (プジ川、無名沢) が数筋形成され、稜線

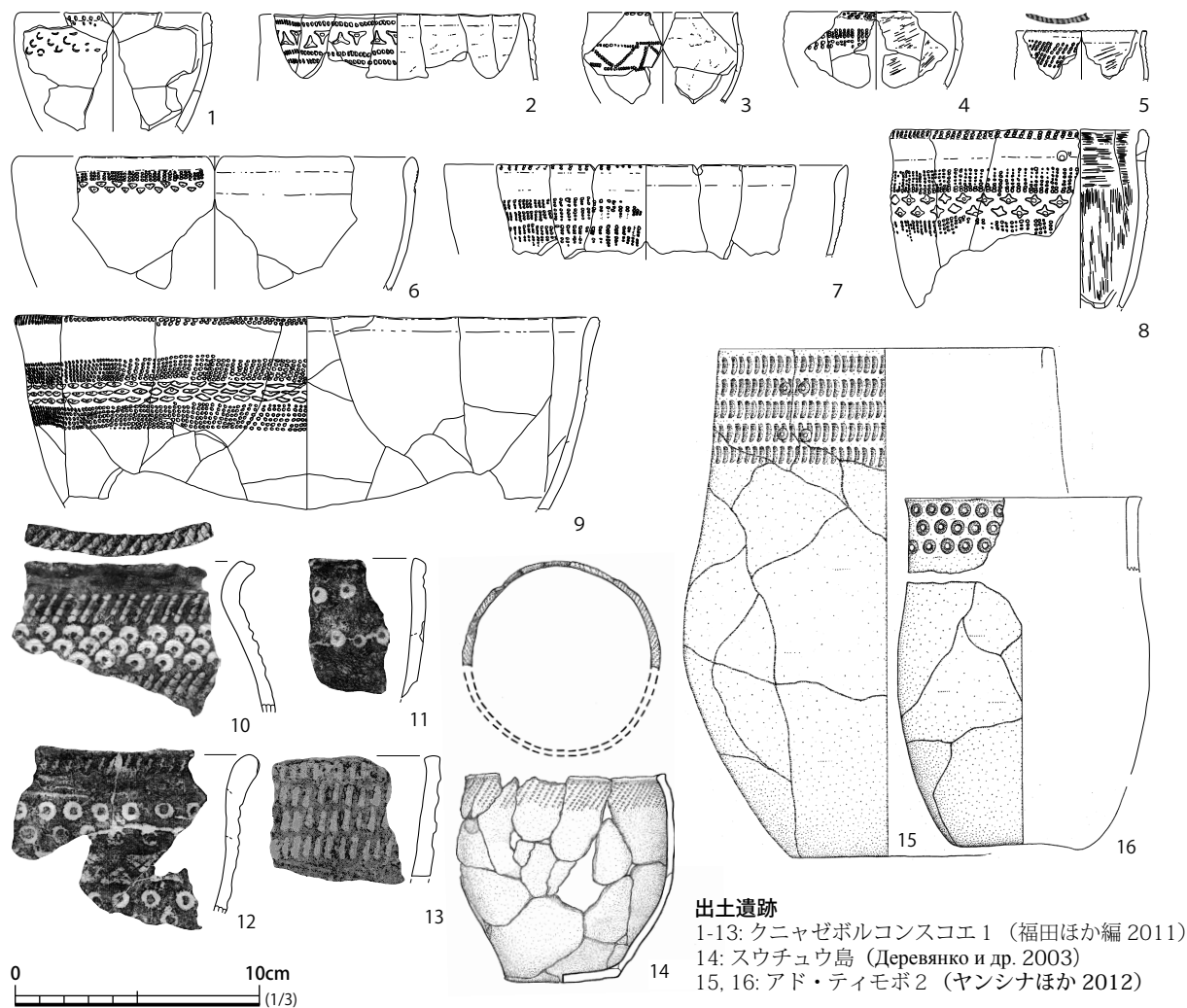


図3 アムール下流域とサハリン中部の新石器時代前期土器（コンドン系土器）

その周辺から遺物が多く採集された。

土器は、新石器終末～古金属器時代のもが多く、なかでもウリル系土器が多い。ほかに、江の浦B式の可能性がある口縁部肥厚帯をもった土器片が1点ある。石器は、尖頭器、石鏃、搔器、石斧、植刃（両面調整）がみつかった。石斧は全面磨製、断面楕円形。剥片石器の石材は赤色ジャスパーが圧倒的多数を占めるが、良質の頁岩も少量ある。鉄分または鉄滓のようなものが付着した砂岩製品（加工痕あり）がみつかった。これらの遺構群は、複数時期にまたがるものと考えられる。

アド・ティモボ 34 遺跡 アド・ティモボ 2 遺跡に連なる丘陵の南側にひろがる平坦面で、多量の石器類を含む破壊された包含層の存在を確認した。倒木根に絡まる土壌から、木葉形尖頭器がみつかった。新たに所在確認された遺跡である。周囲の踏査により、竪穴住居とみられる窪みが複数基確認された。海拔は約 160m。

窪みの近くで、試掘調査を実施した。土層堆積状況はアド・ティモボ 2 遺跡と類似する。1998 年の森林火災による焼土・灰層直下に堆積する明褐色砂質土層上部から、遺物がまとまって出土した。炭化物混じりのレンズ状堆積（厚さ約 10cm）のなかから、複数の木葉形尖頭器を含む石器類が多く出土した（図 7）。近接する竪穴住居と関係する遺物包含層であろう。石材は赤色ジャスパー。土器はないが、新石器時代の遺物とみられる。石器組成は新石器前期に類例があるため、近隣のアド・ティモボ 2 遺跡と関連する大規模な集落遺跡の可能性がある。

アド・ティモボ 35 遺跡 アド・ティモボ 34 遺跡からさらに登った平坦面（海拔約 220m）の

林業機械の作業道で、石器類が多量に採集された。採集地点のすぐ脇で試掘調査を実施した。掘り下げを行ったところ、すぐに遺物包含層に到達した。上層は削平を受けて消滅したとみられる。地表下約 10cm で遺物量は急減し、包含層は終わる。木葉形尖頭器、石鏃、搔器、石斧などの石器が多数出土した（図 8）。剥片石器は、すべて赤色ジャスパー製である。包含層下部から、皿状の落ち込み（深さ約 10cm）が検出され、その埋土中からチップが多く出土した。一部に、植物痕由来の攪拌痕が確認された。新たに所在確認された新石器時代の遺跡である。

3. 14C 年代測定

これまでに、アド・ティモボ 2 遺跡（木炭 2 点、土器付着物 3 点）、アド・ティモボ 33 遺跡（土器付着物 1 点）、関連資料として、ヤンキト 1 および 2 遺跡（土器付着物 3 点）の測定をおこなった（図 4、表 1）。ヤンキト遺跡は択捉島に所在する。資料はサハリン国立大学の調査によるもので、浦幌式等との関連が注目されている。アド・ティモボ 2 遺跡の木炭は、図 5-1 の土器に共伴した資料である。図 4-1 は無文の小破片、図 4-2 は、ウリル系土器で口縁部下に突瘤文列を有する。図 4-4 は絡条体圧痕文による施文が確認される。

4. まとめと課題

アド・ティモボ 2・33～35 遺跡はすべて一連の丘陵の尾根上に立地する。33 遺跡は古金属器時代以降に形成された城砦の可能性がある。34・35 遺跡は新石器時代の遺跡であり、2 遺跡を含めて一連の遺跡群である可能性は否定できない。今後、出土遺物を詳しく検討する予定である。

文献

- 内田和典 2011 「アムール下流域の新石器時代土器編年」『東北アジアにおける定着的食料社会の形成および変容過程の研究』東京大学常呂実習施設 149-177 頁
- 大貫静夫 1992 「極東の先史文化」『季刊考古学』38 17-20 頁
- 大貫静夫 2010 「北東アジア新石器社会の多様性」『北東アジアの歴史と文化』北海道大学出版会 71-86 頁
- 大貫静夫・福田正宏編 2014 『環日本海北回廊における完新世初頭の様相解明』東京大学考古学研究室
- 國木田大 2014 「石刃鏃石器群の年代」『環日本海北回廊における完新世初頭の様相解明』東京大学考古学研究室 25-34 頁
- 佐藤達夫 1964 「女満別式土器について」『MUSEUM』157 22-26 頁
- 夏木大吾・ワシレフスキー・大貫静夫・佐藤宏之・グリシェンコ・福田正宏・熊木俊朗・國木田大・パシエンツェフ・モジャエフ・森先一貴・ペレグドフ・役重みゆき・高鹿哲大・ルシカ 2014 「2013 年度スラブナヤ 5 遺跡発掘調査報告」『第 15 回北アジア調査研究報告会発表要旨』同実行委員会 9-12 頁
- 福田正宏・佐藤宏之・國木田大・役重みゆき・夏木大吾・垣内彰悟・久我谷溪太・西村広経・高鹿哲大・熊木俊朗・辻誠一郎・森先一貴 2014 「北海道湧別市川遺跡の発掘調査」『第 15 回北アジア調査研究報告会発表要旨』同実行委員会 21-24 頁
- 福田正宏・グリシェンコ・ワシレフスキー・大貫静夫・熊木俊朗・國木田大・森先一貴・佐藤宏之・モジャエフ・パシエンツェフ・ペレグドフ・役重みゆき・夏木大吾・高鹿哲大 2015 「サハリン新石器時代前期スラブナヤ 5 遺跡の発掘調査報告」『東京大学考古学研究室紀要』29 印刷中
- 福田正宏・シェフコムード・内田和典・熊木俊朗編 2011 『東北アジアにおける定着的食料社会の形成および変容過程の研究』東京大学常呂実習施設
- 福田正宏・シェフコムード・森先一貴・熊木俊朗編 2014 『環日本海北回廊の考古学的研究（Ⅰ）』東京大学常呂実習施設
- ヤンシナ・ゴルブノフ・クズミン（福田正宏訳）2012 「サハリン新石器時代前期に関する諸問題」『黒曜石の流通と消費からみた環日本海北部地域における更新世人類社会の形成と変容（Ⅰ）』東京大学常呂実習施設 10-26 頁
- Васи́левский А.А., Грищенко В. А. 2014 Сырьевые центры и сырьевой обмен в эпоху камня и палеометалла на Сахалине и Курильских островах. *Россия и АТР*, 2014-№ 2. Владивосток. С. 114-126.
- Горбунов С.В. 2000 Археологические памятники Тымовского района. *Вестник Сахалинского музея*, № 7. Южно-Сахалинск. С.264-

Дервянко А.П., Чо Ю-Джон, Медведев В.Е., Шин Чан-Су, Хон Хён-У, Краминцев В.А., Медведева О.С., Филатова И.В. 2003
Неолитические поселения в низовьях Амура. Сеул: ГИИKN РК.

表1 アド・ティモボ2・33遺跡、ヤンキト1・2遺跡の ^{14}C 年代測定結果

No.	Site	Sample No.	Figure No.	Material	^{14}C age (BP)	Lab. No.
1	Ado-Tymovo 2 (2014)	ADO2-C3		wood charcoal	7380 ± 50	MTC-17508
2		ADO2-C4		wood charcoal	7350 ± 50	MTC-17509
3		ADO2-P1	Fig.5-1	charred remains on pottery (lip)	8070 ± 60	MTC-17510
4		ADO2-P2	Fig.4-1	charred remains on pottery (inner)	7640 ± 50	MTC-17511
5		ADO2-P3	Fig.6-1	charred remains on pottery (inner, rim)	7920 ± 60	MTC-17512
6	Ado-Tymovo 33 (2014)	ADO33-P1	Fig.4-2	charred remains on pottery (outer, rim)	2210 ± 40	MTC-17513
7	Yankito 1	YK1-F2A	Fig.4-3	charred remains on pottery (outer, body)	7450 ± 60	MTC-17506
8		YK1-F3	Fig.4-4	charred remains on pottery (outer, rim)	7340 ± 50	MTC-17507
9	Yankito 2	YK2-F1	Fig.4-5	charred remains on pottery (inner, body)	6730 ± 50	MTC-17505

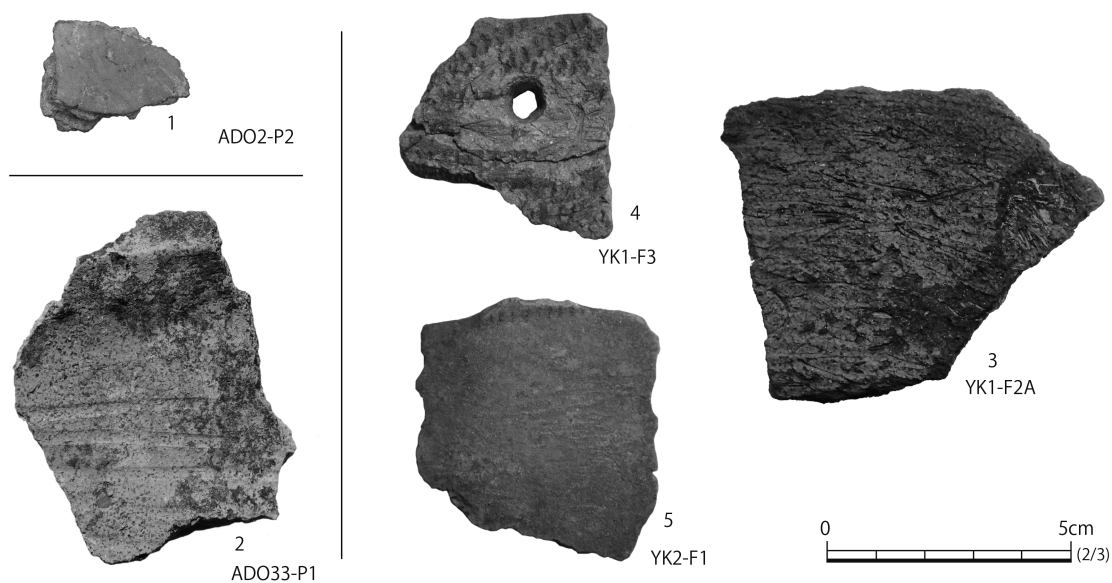


図4 アド・ティモボ2・33遺跡、ヤンキト1・2遺跡の測定資料

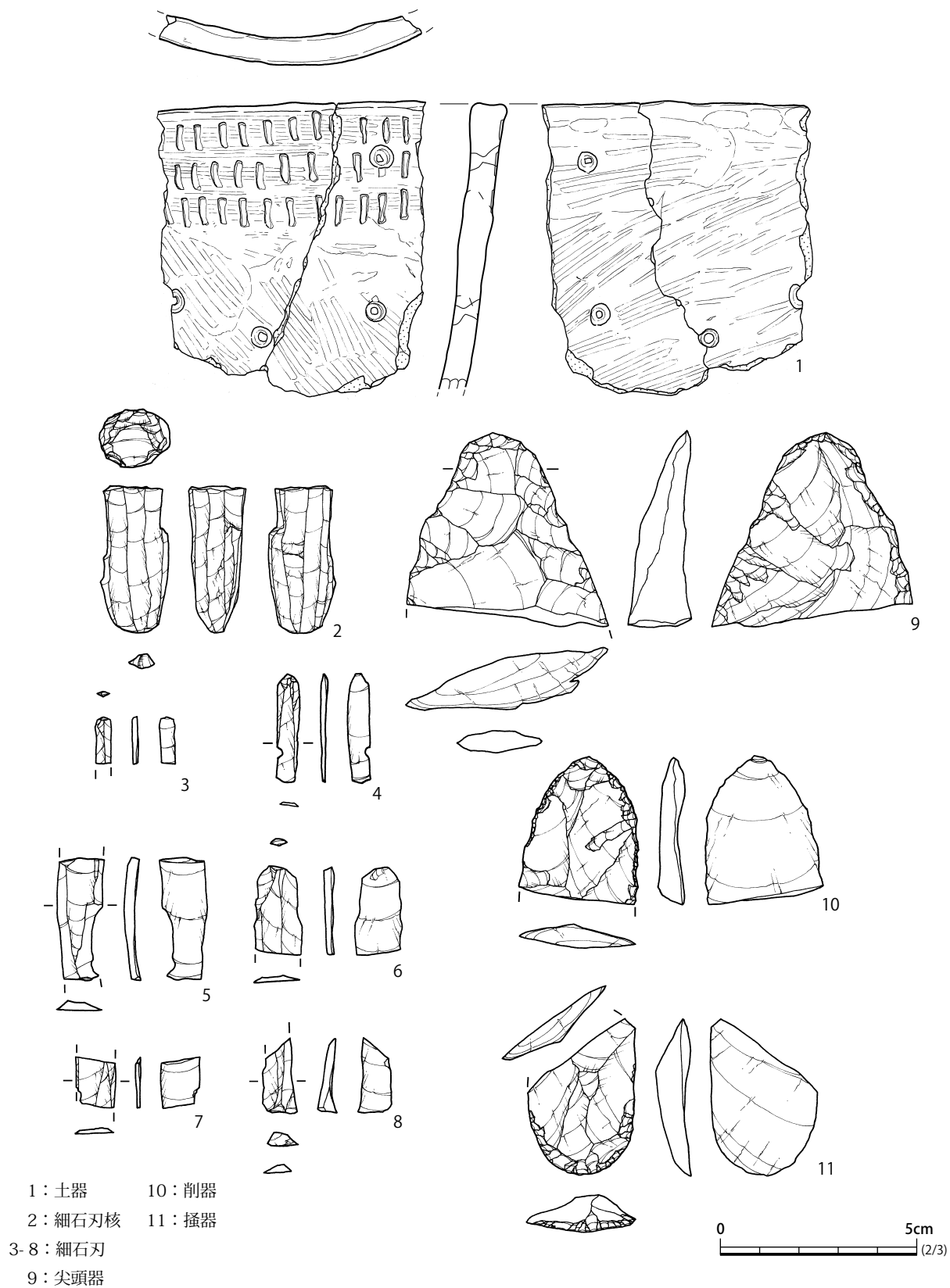


図5 アド・ティモボ2遺跡住居出土の遺物

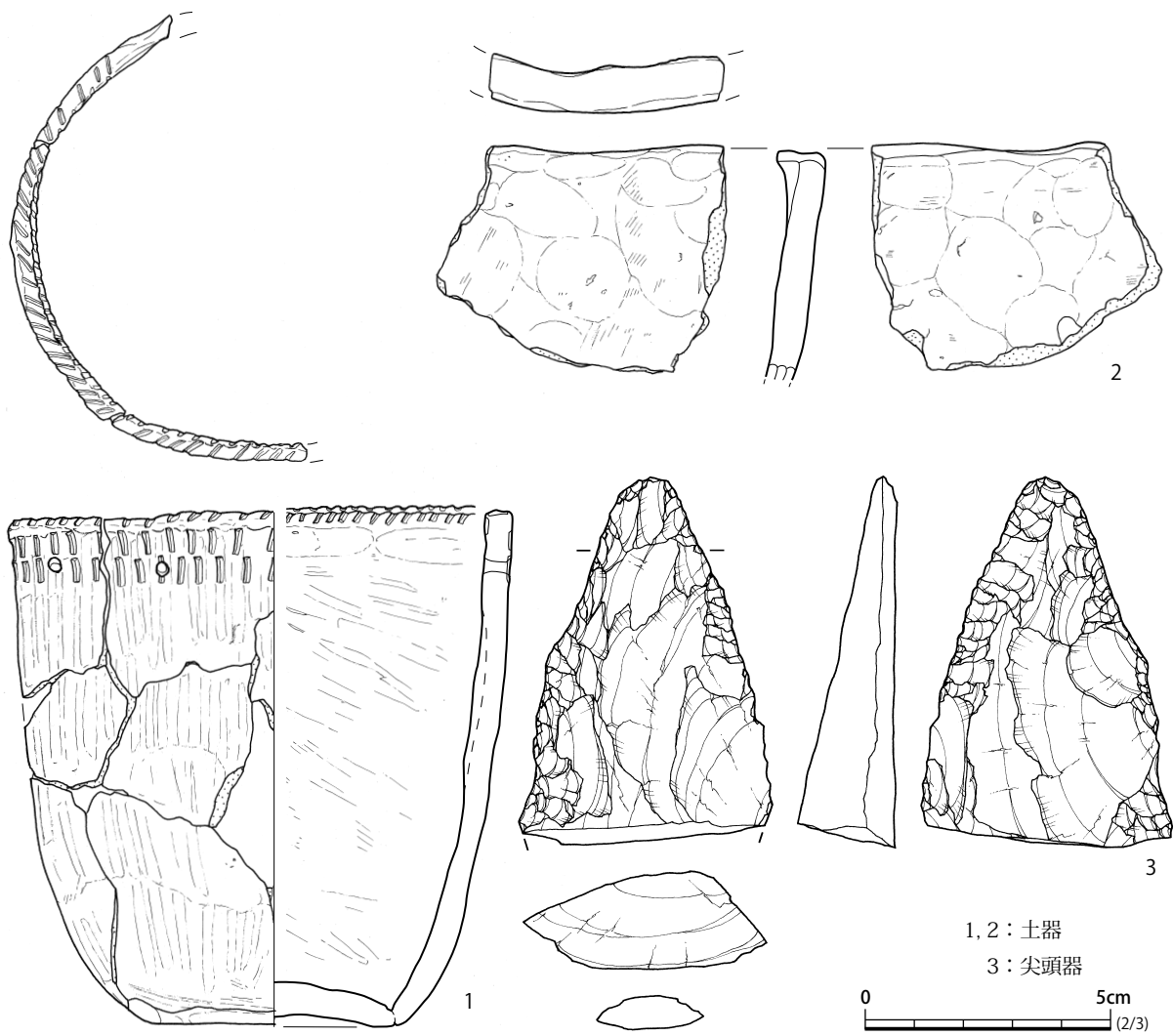


図6 アド・ティモボ2 遺跡出土の遺物

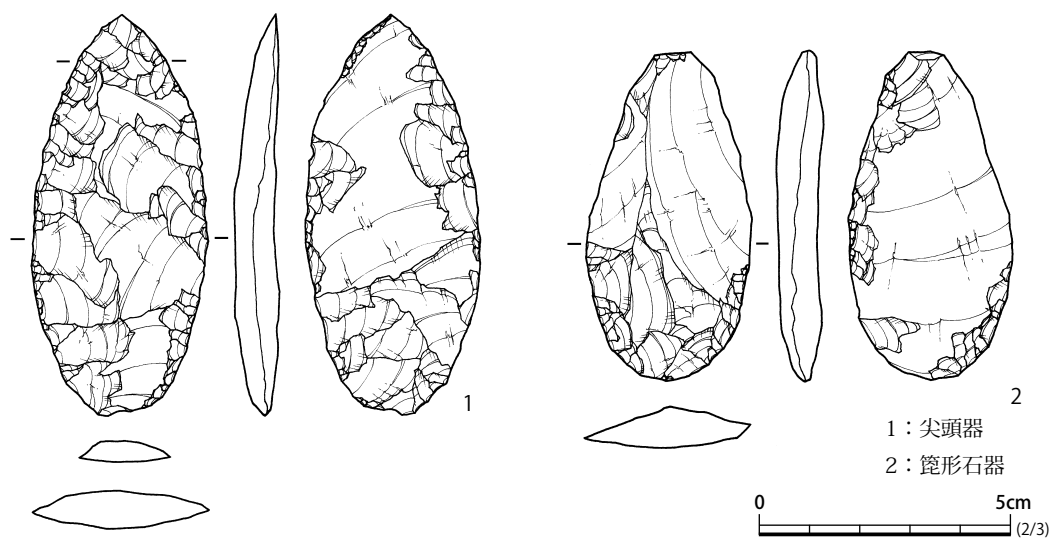


図7 アド・ティモボ34 遺跡出土の遺物

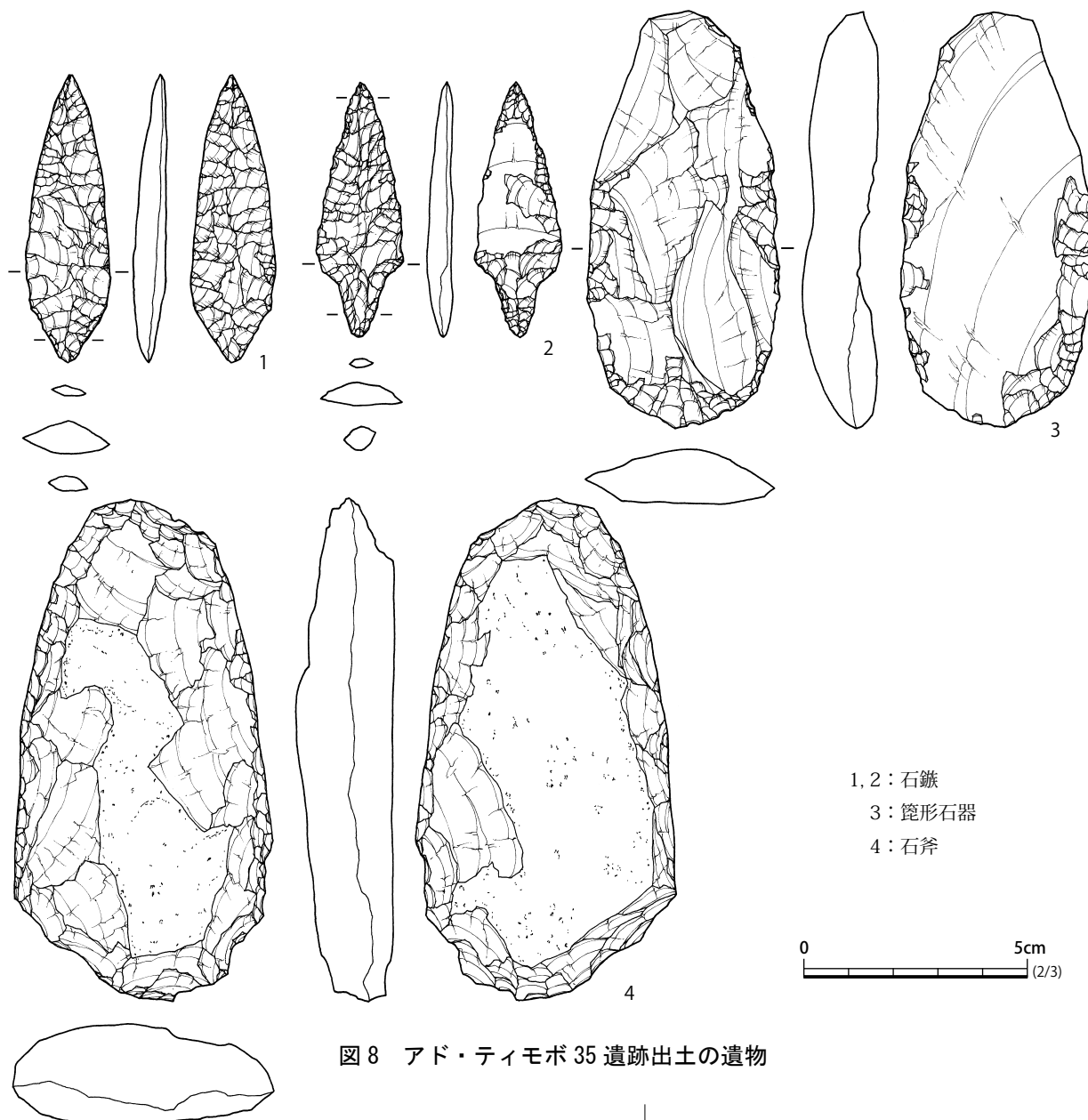


図8 アド・ティモボ 35 遺跡出土の遺物

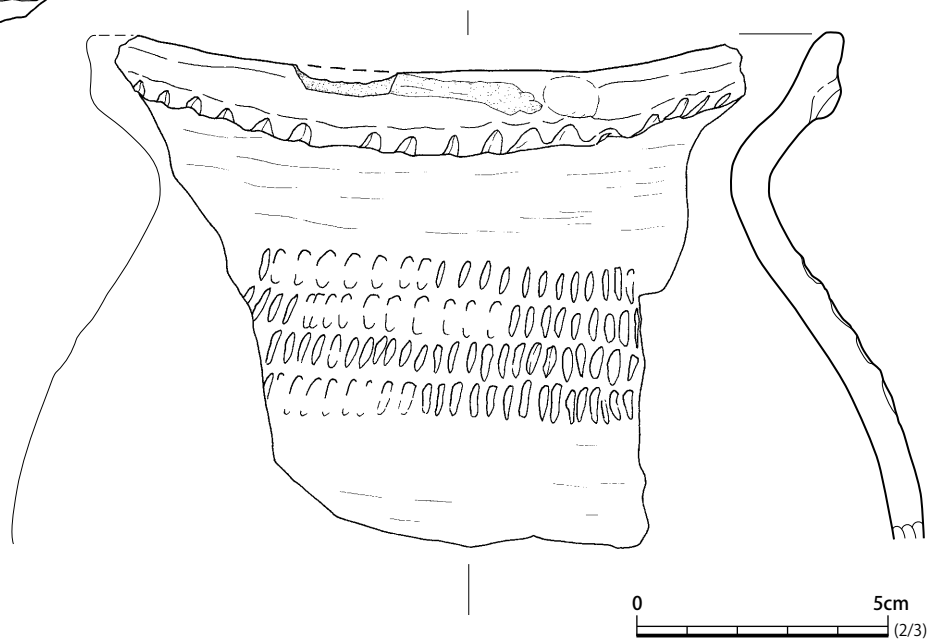


図9 イルキル1 遺跡の土器

第 16 回北アジア調査研究報告会 発表要旨

発行 2015 年 2 月 21 日

編集 〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1

東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室
佐藤宏之

発行 北アジア調査研究報告会実行委員会

印刷 (株)風雅プランニング

〒970-8032 福島県いわき市平下荒川字久世原
38-206

電話 0246-88-6580